Zu «Die Verneinung» von Freud

Jun Yamamoto

Dieser Beitrag, in dem der Verfasser sich mit der «Die Verneinung» betitelten Schrift von Sigmund Freud befaßt, ist gegliedert in drei Teile: Einleitende Bemerkung, Japanische Übersetzung des genannten Textes und Kommentar über denselben mit Anmerkungen.

Ein Übersetzungsvorschlag wurde für nötig gehalten, um die mit dem menschlichen Sozialleben zusammenhängende Nuance der Schlüsselbegriffe in der Freudschen Schrift wie Verurteilung und Verwerfung außer Verneinung klarer hervorzuheben als in einer bestehenden Übersetzung. Damit dient er zugleich zum im Japanischen verfaßten Kommentar als Textgrundlage.

Im letzten Teil versucht der Verfasser, aus diesem Text das kritische Potential der Psychoanalyse für das philosophische Denken abzugewinnen. Um es zu illustrieren, wird die Philosophie von Descartes und Kant kritisch in Erwägung gezogen.

Die Bedeutung dieses Freudschen Textes besteht für uns in erster Linie darin, daß die Psychoanalyse das Urteilen, also den Intellekt und seine Funktion, ihren therapeutischen Erfahrungen gemäß und theoretisch im, vor allem dynamischen, Zusammenhang mit den anderen Kompomenten der Psyche zu begreifen weiß. Damit wird die Primatstellung des Intellekts in Frage gestellt, wie die traditionellen logischen Prinzipien wie Pricipium Contradictionis der Kritik unterzogen und analysiert werden. Der Hinweis von Freud, daß in der analystischen Arbeit Nein-sagen seinen Gegenteil bedeuten kann, ist der erste Anhaltspunkt seiner Analyse, durch die die ‹Verneinung› als Nachfolge des affektiven ‹Verdrängungsvorgangs›

verstanden wird.

Anschließend werden die ihr verwandten Begriffe wie ‹Verurteilung› und ‹Verwerfung› untersucht und differenziert, durch die der Verdrängungsprozeß in intellektueller Verkleidung ersetzt wird. D.h. das Urteil wird samt seinen plausibel erscheinenden Begründungen symptomatisiert. Weiter wird über das Begriffsverständnis hinaus anhand anderer Freudschen Schriften verhandelt, mit welchen Mitteln der Intellekt durch die Verurteilung und Verwerfung seine Abwehr gegen das Verdrängte rationalisierend vorantreibt und bekräftigt, und es wird auf zwei Begriffe hingewiesen, mit denen Freud denselben Mechanismus darstellt: ‹Isolierung› und ‹Verallgemeinerung› als Verharmlosung. Mittels der Untersuchung des Freudschen Textes wird die selbstkritische Reflexion der Denktätigkeit ansatzweise unternommen.

フロイトの『否認』

山本　　淳

はじめに

本稿はジクムント・フロイトの論文Die Verneinungの〈試訳〉と，この論文の哲学的な意味に注目したコメントからなる。

この論文の訳を載せるのは，もちろん理由があってのことである。試訳のあとに載せた〈『否認』について〉がテキスト分析だからである。既存の翻訳には重要な部分に一カ所，誤訳が見つかる。また，コメントをするにあたっては注目せざるを得ない原語の持つ含意が，その翻訳では十分に反映されていないようにわたしには思われる。たとえばフロイトのこの論文のテーマは〈判断〉であると言い換えてよいが，そう訳せるドイツ語の〈Urteil〉には，周知のように〈判決〉という意味がある。もちろん原語の多義を十分にくんだ翻訳はなかなか困難であるにしても，『否認』のキーワードといえる概念と，それと関係してフロイトが使っている多くの語が法律用語としても使われるという事実には注目せざるを得ない。ついでながら，こうした翻訳上の問題はたとえばカントの『純粋理性批判』の翻訳においても見いだせる。たとえば〈die Erkenntnis〉と〈das Erkenntnis〉が一括して〈認識〉と訳されてしまい，後者の〈判決〉という意味が見えなくなってしまう，などである。

テキスト分析には原語であるドイツ語の持つニュアンスの尊重が重要であることは言うまでもない。このことは精神分析に関しては特に重要であろう。なぜならば精神分析は理論であるとともに治療法であり，そこでは分析家と被分析者の間で交わされる〈言葉〉が主要な手段だからである。治療のために被分析者は精神分析の概略を知ることで，そこで行われることの意味を理解する。そのために精神分析の概念の多くは，訳ではなかなかそうはいかないものの，被分析者が理解しやすい社会生活を反映した言葉を使っている。したがって理論においても，言葉のニュアンスこそが大事になる分析の場面を反映させつつ，概念が形成されるのである。

もちろん訳著者は試訳が間違いのない厳密なものとなるよう努力したが，この試訳が〈『否認』について〉に述べる私の解釈に依存したものであることも必然である。最後に試訳を示す理由と

して，このフロイトの小さな論文の意味をあげなければならない。それについては〈『否認』について〉で明らかになるであろう。

〈『否認』について〉において私はこのテキストの解釈を試みた。しかしそれはテキストに注を付すといった解釈ではない。このフロイトの論文が思考する者に〈思考〉について反省を求めている点が，そこでのテーマである。仮にフロイト自身はそれを求めたわけではないとしても，この論文にはそれだけのインパクトがある。それは理性の不安というインパクトである。そこでは理性は，理性として浄化される前の，理性にとってはたぶん抑圧してしまいたい母斑をつけた姿で現れてくるからである。またこの論文は，クラウス・ハインリヒが著作のひとつを『ノーを言う難しさ』と名づけたように，何に対してであれ，理性的な理由のあるプロテストの〈ノー〉が，隠れた〈イエス〉であるかもしれないことを教えている。もしそうだとすれば，思考は思考自体にまとわりつくこうした縺れと，どう向かい合えばよいのであろうか。求められているのは思考の自己分析であり，自己認識である。このような広い意味での哲学的な課題に対する精神分析の寄与を，このフロイトの論文に即して示すことが〈『否認』について〉の目的である。この試みに取り組むにあたっては，上に名をあげた哲学者から継続的な刺激を受けた。より直接的には，ジャック・ラカンの『エクリ』第二巻に載っている〈否認〉についての二つの文章と，同書に収められているジャン・イポリットが行ったこの論文についての〈評釈〉が刺激になった。そこで行われているのとは別の，もうひとつの解釈が提示できるように思えたからである。

最後にフロイトの論文のタイトルになっている語Verneinungの訳についてひとこと述べておく。邦訳フロイト著作集でも，『エクリ』でも，それは〈否定〉と訳されている。私はこの訳を使わず〈否認〉とした。理由はフロイトが，〈否定〉という訳語からにじみ出る中性的な性格，論理学における関数的もしくは操作形式的な性格を問題にしているのではなく，分析的関係や家族や社会の中でなされる人間の判断と認識一般で行われる〈Verneinung〉に着目し，そこから出発しようとしていると考えるからである。それと関連する語の多くが裁判用語であることに注意すべきだと思われるのも，フロイトの概念が現実の世界の感性的で対象的な諸関係のなかに定位されているからにほかならない。

フロイトの『否認』[i] 試訳

分析作業の間に患者が思いついた事を提示するその仕方は，私たちにいくつかの興味深い観察のきっかけを提供する。「わたしが何か侮辱するようなことを言おうとしているとお考えになるかもしれませんが，本当にそんなつもりはありません」。これを私たちは，その時まさに頭に浮かんだ思いつきの，投影による棄却ととるのである。あるいは患者はこう言うかもしれない。「夢の中のその人物は誰なのでしょうとお尋ねですね。それは母ではありませんよ」。この言葉を私たちは，だからこそそれはあなたの母親だと訂正する。私たちは遠慮せずに，解釈するに当ってはこうした否認を無視し，思いついたことのそのままの内容を抜き出すのである。つまり患者は次

のように言っているととるのである。「その人物との関連では母が思い浮かびますが，その思いつきが当たっているとする気になれないのです」

こうした抑圧されて無意識となったものについて，求めていた解明が時には少しも手間のかからない方法で得られることもある。次のような質問によってである。そうした状況でいちばんありそうにないことは何だと思いますか。その時あなたにとっていちばん関係がないことは何だと思われますか。患者がこの罠にはまって，いちばん信じがたいと思っていることを口にすると，それによって患者は，十中八九それが求めていた当のものであることを承認しているのである。このような実験の好対照は多くの場合，すでに自分の症状を入門程度には理解している強迫神経症患者において示される。「別の新たな強迫観念にとらわれています。その観念との関連ですぐに思いついたのは，この強迫観念はこれこれの特定のものを指し示しているのではないかということです。でも，それは違います。そうであるわけがありません。そのとおりだったら思いつくはずがないと思います」。患者が治療を受けて要領を覚えたこうした理由づけで却下している当のものこそが，もちろん，新たな強迫観念の意味なのである。

したがって，抑圧された観念内容や思想内容は意識へと突き抜けてくることができるのである。とは言っても，その内容が否認されることによって，という条件の下でである。否認は抑圧されたものを認知する一つの仕方である。それはすでにその本性からすると抑圧の止揚であるが，しかしながらもちろん，抑圧されたものの仮定的受け入れではない。知的機能が情動の展開からの分離をここでどのように果しているかが見て取れる。否認という手を使うことで，抑圧の展開の一方の結果だけは取り消され，そのために抑圧された観念内容は意識に至らないのである。その帰結として生じてくるのは，抑圧の本質的なものが存続しつつ行われる，抑圧されたものの知的な仮定的受け入れの一種である。[原注1] 分析作業の推移にともない，私たちはよく，そのとき行っている分析状況を変更することがある。それはこれまでのとは異なる変更であり，非常に重要で一風変わった変更である。うまく否認にも打ち勝ち，抑圧されたものの知的な仮定的受け入れを余すところなく成し遂げることに成功しはしても，抑圧の展開自体はそれでもまだ止揚されないのである。

思想内容を是認すること，もしくは否認することが知的な判断機能の課題であることから，私たちはこれまで述べてきた所見によって，こうした機能の心理学的な起源へと導かれたのであった。判断してなにかを否認するということは，とりもなおさず，否認されたものが，できれば抑圧したい当のものであるということを意味している。〔抑圧されてしかるべきという〕有罪判決を下すことは抑圧の知的代替であり，そのとき発せられるノーは抑圧のひとつの標示である。「メード・イン・ジャーマニー」という標示と同じような原産地証明なのである。このような否認のシンボルをつけることで，思考は抑圧が課す諸制約から解放される。そして思考は，思考が力を発

原注1 このような展開は「召還」という周知の展開の基礎をなしている。「こんなに長い間扁頭痛がないなんて，なんてすばらしいんでしょう」。しかしこれは発作の最初の予示であり，発作が起きそうなことをすでに感じ取ってはいても，それをまだ信じたくないのである。

揮するためには欠かすことのできない内容の富んだものになってゆく。

判断機能は本質的に二種の決定を下さなければならない。判断機能がなすべきことのひとつは，ある物に対しなんらかの性質の認否を行うことである。もうひとつは，観念に対し現実における存在を承認するなり，存在を争うなりすることである。決定されるべき性質は，もともとは，良いか悪いか，有益か有害かであったと思われる。最初期の口唇的な欲動活性の言語で言えば，それを食べたい，もしくは，吐き出したい，という表現になる。敷衍すれば，それを自分の中に取り入れたい，もしくは自分の外に閉め出したい，という表現になる。言い換えれば，それは私の中にあるべきだ，か，私の外にあるべきだ，である。別のところで詳述したように，原初の欲望自我は，良いものはすべて自分の中に入射しようとし，悪いものはすべて投げ出そうとする。悪いもの，自我にとって疎遠なもの，外にあるもの，これらは欲望自我にとってはとりあえず同一のものなのである。[原注2]

判断機能が下す決定のもう一つのもの，つまり観念された物の実在についての決定は，最初の欲望自我から発達した最終的な現実自我の関心事である。(実在検証。) ここまでくるともう，知覚されたもの（物）を自我の中に受け入れるべきか，受け入れるべきではないかは問われない。問われるのは，自我の中に観念としてあるものを，知覚（現実）においても再発見できるかどうかである。おわかりのように，またしても外と内の問題なのである。実在しないもの，単に観念されたにすぎないもの，主観的なものは内にしかない。それとは別のもの，実在するものは，外にもある。この発達段階では欲望原則への配慮は脇に押しやられてしまっている。ある物（満足を与えてくれる客体）が「良い」性質を持っているかどうか，つまり自我への受け入れに価するかどうかだけが重要なのではなく，外界にあるかどうかも重要なのだということを，経験が教えるのである。外界にあれば欲求に応じそれを我がものとすることができるからである。このような進歩を理解するには，すべての観念は知覚から生じるのであり，知覚の反復であることを思い出さなくてはならない。したがって，観念が存在することがすでに，もともとは，観念されたものの実在の保証なのである。主観的なものと客観的なものの対立が最初からあったわけではない。この対立は，一度知覚されたものを思考が観念において再産出し，そうして再度現出させる能力を得ることによって生じるのである。その間，外の客体はもう手の届くところにある必要はない。実在検証の最初の，そして目前の目的は，したがって，観念されたものに照応する客体を現実の知覚の中に見つけ出すことではなく，それを再発見することであり，それがまだ手の届く範囲にあることを確認することである。主観的なものと客観的なものとの疎外に寄与するもう一つのものは，持って生まれた思考力にそなわったもう一つの能力に由来する。観念における知覚の再産出は，いつも知覚の忠実な反復であるとは限らない。再産出物はいくつかのことが削除されて改変されていたり，いろいろな要素が融合されて変更されていたりしうる。このような場合実在検証は，こうした歪曲がどの範囲にまで及ぶのかをコントロールする役目を負う。だがしかしわか

[原注2] この箇所については，『欲動とその運命』，10巻，における詳述を参照。

るように，実在検証の始動の条件は，かつて現実の満足をもたらした客体のいくつかがとうに失われてしまっているということなのである。

判断を下すことは知的な行動である。それは運動性の行動の選択について決定を下し，思考の猶予期間を終わらせ，思考から行為へと引き継がれてゆく。思考猶予期間についても私はすでに別のところで検討した。[ii] それは試し行動，わずかなエネルギーの払い出し経費ですむ運動性の手探り行為と見なせるものである。どこで自我は以前にこうした手探り行為を練習してきたか，どの場所で，いまは思考の展開の際に応用しているこうした技術を習得したのか，思いをめぐらせてみよう。こうしたことは心的装置の感覚系の末端で起こったことであった。感覚器官による知覚の際に起こったことであった。私たちの仮定では知覚は純粋に受動的な展開などではない。私たちの仮定では自我は周期的に少量の補給エネルギー量を知覚システムに送り込み，そのエネルギー量を使って外的な刺激の味利きをし，手探りの斥候活動が終わればそのたびに退却するのである。

判断の研究はひょっとしたら，知的な機能の発生について，それが本源的な欲動の種々の活性相互の戯れから生ずるという洞察の口火を，はじめて開いてくれるかもしれない。判断を下すことは，もともとは欲望原則にしたがってなされた自我への取り込みの，もしくは自我からの突き出しの合目的的な発達の延長上にあるものである。こうした判断の対極的な作用は私たちの仮定した二種の欲動群の対立的性格に照応していると思われる。結合の代替としての是認，それはエロスに，突き出しの後継である否認，それは破壊欲動に帰属しているのである。なんでもかんでも否定する快，すなわち多くの精神病者の拒絶症は，おそらくはリビド性の構成素の撤収によって起きる欲動の脱混淆化を徴証するものとして理解されてよい。しかし判断機能の発揮は，否認のシンボルの創出により，抑圧の諸成果からの，したがってまた欲望原則の強制からの第一段階の自立が思考に許されることによって，はじめて可能になるのである。

これまで述べてきた否認の考え方は，分析においては無意識からなされる「否」は見いだされないということ，無意識の承認は自我の側からは否定的な形式で表現されるということから強く支持されている。考えていたのはそれではありません，とか，そんなことは考えませんでした（考えてもみませんでした）という言葉で被分析者が反応する以上に，無意識の掘り起こしに成功したことの強力な証拠はほかにないのである。

フロイトの『否認』について

フロイトは思考一般について精神分析からの見解を述べるに当たり，興味深いことに，「否認」から始め，それを「抑圧」と関係させている。フロイトは『否認』の冒頭で分析作業の一場面を紹介し，最後にもそこで述べたことを繰り返しながら，この論文を次のように締めくくっている。治療技術としての精神分析は「無意識の掘り起こし」を目指す。そのための非常に強力な手段は，被分析者が分析の素材である思いついたことを，〈それは違います〉というような「否認のシンボ

ル」で，無意識とは無関係であると主張するような状況である。

理論としての精神分析がヒステリーや神経症患者の治療から生まれたように，ここでも発端は分析の場面での否認である。否認の特徴は，患者を苦しめている「抑圧されたもの」が思いつきとしてその住処である無意識から「意識へと突き抜け」てきてしまったために，それに対し場合によってはもっともらしい理由をつけて意識が行う〈抵抗〉であるという点である。したがって被分析者が行う否認はもはや抑圧ではない。それは「抑圧が課す諸制約からの解放」であるような抵抗である。

被分析者により真実でないと主張されることこそが逆に真実なのだという，逆転した解釈が許される根拠となるのは精神分析の〈抵抗〉と〈抑圧〉というペアの概念である。[iii] このテキストには抵抗という概念は一度も出てこないが，フロイトがこの『否認』においても，否認を想起されたものに対する知的な抵抗と取っていることには疑問の余地がない。[iv] ラカンが『否認』に関して述べるとき，抵抗の概念を中心に据えているのもそのためである。[v] 想起されたものが意識の抵抗を受けるのは，それが「できれば抑圧したい」，無意識にとどめておきたい内容を含むからである。ここでフロイトは否定という知的判断の一形式も，いわゆる没価値的で客観的な思考活動と取らず，心の力動関係の中において分析されるべき行為とみなす姿勢をとる。知性は知性という浄化されたままの姿で分析されるのではなく，人間の心を構成する動的要素のひとつとして，それらとの関係の中でとらえられる。このことこそ，この小さな論文の哲学にとっての意味なのである。

このような，分析の場面において経験される否認が，否認一般の，ひいては思考の分析的研究の発端にある素材である。この素材はある中間点を示している。ここでは判断機能がまだ〈情動的〉な行為である段階と，それから「分離」して知的な行為に成長した段階との，中間にあるとフロイトは考えているからである。被分析者の否認は，無意識に行われる抑圧とはもはや言えないにしても，明らかに心的な抵抗として機能しているのである。このことからフロイトは，情動的な判断から論理的判断等に代表される知的な判断へ，という判断の発達史的構図を描くのである。

原初の判断機能が情動から分離していない状態とは，フロイトによれば，判断する主体が「欲望原則の強制」に依存している状態にほかならない。判断機能は欲動と一体化しているので，本能的な欲求を満たすことだけを追究する。この段階の心は，精神分析の理論のトポロジーから概念を借りて言えば，エスに吸収されている。[vi] そのため対象については欲求を満たしてくれるかどうか，「良い」対象か「悪い」対象かが主体にとっての焦眉の問題なのである。快をもたらすものに対しては，「取り入れ」，もしくは「取り込み」が行われる。反対に，快をもたらさないものは「閉め出し」，もしくは「突き出し」にあう。これがこの段階での抑圧の形態である。こうして「良い」は「内」と，「悪い」は「外」と結合される。フロイトはそうは言っていないが，これを空間観念の発生と原初形態についての精神分析の見解と見ていいであろう。[vii] 原初の自我が習得するこのような機能が欲望原則の支配から脱却したとき，それは〈良い悪い〉を越えた事物の性質に

ついての判断となると考えられているのである。

時間観念についてもひとこと言っておけば，この段階では主体は欲求原則に従っているので，たとえ〈良い〉が〈悪い〉に変化したとしても，それは主体の外に放り出されるなり外に放っておかれるなりするだけである。したがって主体の中は，通常，素早い欲求の充足により無変化の状態を保つと考えられる。フロイトがエスを〈無時間的〉[viii] と呼んだのは，このような理由からである。このことはまた，原初の時間観念が生まれるのはこうした変化を主体が経験するようになってからであることも示唆している。

フロイトは判断の歴史を探るに当たり，判断の機能を大きく二つに分けている。一つはいま述べた，判断すべき対象の性質にかかわるものであり，もう一つは対象の有無にかかわるものである。「物の実在についての決定」の原初の形態は欲望原則から「現実原則」が発達してきたときに生成するとフロイトは考えている。

「良い」と「悪い」の経験はそれぞれの観念を作り出す。ひとたびこのような観念が生成すると，「内」にあるのはとりあえず観念だけなので，主体は観念を作り出した実在を「外」にさがし，「再発見」し，そのうえで欲望原則に従った「取り込み」と「閉め出し」を行わなければならない。〈良い対象〉に限って言えば，観念が生まれたことで，再発見という「実在検証」を経て観念に照応する快の対象を現実に見いだして，はじめて「取り込み」が行われるようになる。こうして〈良い観念〉に照応するものが現実にあるかどうかが，主体の関心事となる。これをフロイトは「現実原則」と呼んでいる。〈内と外〉，〈主体と客体〉の分離は明確となる。

この段階になると「欲望原則への配慮は脇に押しやられてしまう」とフロイトは書いているが，この言葉を現実原則による欲望原則の駆逐と取るべきではない。わたしの理解では，両者はいわば手段と目的の関係のように思われる。観念の生成により欲望原則は現実原則に従う必要がでてきたのである。つまり理論的には，一度目的のために何らかの手段が必要になると前者の達成は後者に依存するようなことも起こりうるし，同時に，目的なしの手段も意味をなさないといった，弁証法的な関係が生じてくる。したがってこの二つの原則の関係は，一方が他方にとって替わるような関係でも，単純な対立関係でもない。[ix] いずれにしても「欲望自我」にとっては「現実自我」という緩衝帯ができることになり，自我の情動からの分離は一歩を踏み出すのである。こうして外の現実に目が向けられるようになる。欲望原則は「現実原則」へと発達を遂げ，自我は〈現実的〉になる。と言うよりむしろ，現実的な〈自我〉が生まれてくる。

観念が生じてくることでそれに照応する実在の「取り込み」は，「再発見」というプロセスを経なければならなくなる。しかしここには二つの障碍が待ち受けている。ひとつは対象がその間になくなっているという可能性であり，もうひとつは観念に「歪曲」が生じて，再発見が困難になってしまうことである。ひとことで言えば，快をもたらすものを再発見できないという障碍である。「内」と「外」はこの場面においても，主体が快を得るための前提である。また同時に，対象の消滅によるものであれ，観念の歪曲によるものであれ，両者の間に生じた〈変化〉によってこのとき時間の観念が生じてくると考えられる。時間の観念は〈内と外〉の観念を前提とするわけであ

る。「実在検証」という〈第二の判断機能〉において抑圧されることになる不快は，何よりもまず，実在を認知できず，主体にとって脅威となってしまう観念である。

以上がフロイトが考える知的判断機能の「練習」段階である。欲動の対象の性質と存在を感官を通して知覚しながら，感覚的な自我は判断することを「習得」するのである。練習の内容は「内」と「外」の分離であった。それはまた，〈情動〉とその〈対象〉，ないしは情動の依代である「観念」と「実在」を分離することであった。もっともよい「分離」の練習は，うまくいった「取り込み」や「再発見」ではないであろう。その場合には，分離の知覚における緊張関係は欲求の充足とともに解消され，欲望自我は「内」に「退却する」からである。それとは反対に不快な対象が経験されるとき，また「再発見」の失敗により観念が不快なものとして経験されるとき，情動的緊張関係は「突き出し」や「抑圧」によらなければ解消されないので，分離は心的に遂行された経験となると考えられる。

フロイトが，思考は「否認のシンボルの創出により」自立した思考となると書くとき，そしてこう書くことで「是認」にではなく「否認」に思考能力の形成にとっての特別な地位を認めるとき，彼は「突き出し」や「抑圧」こそが「内」と「外」との間の緊張を経験させるのであり，それが否認という「後継」を生むと考えているのである。

ところでフロイトは，〈再生産〉という意味の語を使って観念を本質的に実在のReproduktionと，つまり「再産出（物）」と呼ぶ。ここで彼はこの語の本来の意味をくみ取っているのである。すなわちそれは，マルクスの言葉を借りて言えば，欲求を充足するために行われる〈労働の対象化〉[x]，つまり再産出するにあたり放出されたエネルギーが固形化したものである。観念は「欲望自我」から情動的エネルギーの「補給」を受けているのである。カントが感官はその受容性により心的な像をつくると『純粋理性批判』で言うとき，この「受容性」という言葉で彼は，フロイトがこの論文で暗に指摘していると思われるように，観念へのエネルギーの補給という主体的な側面をまったく希薄化している。無視していると言わず，希薄化していると書いたのは，カントも，観念は心が対象から情動的な刺激を受けることで作られると，動詞afficirenあるいは名詞Affectionenという語を使って述べているからである。[xi] ところが，対象に情動的に刺激される心がどのような心なのか，その情動がどのような情動なのかはまったく明確でない。結局，カントの情動とは，もはや情動的と言えない刺激の受容媒体であって，論理的思考に併呑された感性であり，そのようなものとして〈カテゴリー〉の統一的支配を受ける，〈多様な〉世界と一元的に向かい合う〈純粋な〉何かなのである。このような哲学的見解と比べてみたとき，フロイトの観念の概念は十分にその主体的生産的な側面を考慮していると言えるだろう。

否認は〈抑圧の後継〉であるとフロイトは言う。「後継」であって「抑圧」でないのは，後者とは違い抑圧したいものの「意識への突き抜け」が起こってしまっているからである。抑圧は機能不全に陥っている。ノーは事後に発せられるのである。このことは「否認」が抑圧の機能を肩代わりするということも予想させる。ノーは「抑圧したいもの」につけられる無意識産という「原産地証明」である。この標をつけることで，その「存在」はいやでも認められることになる。そ

のためにフロイトは，否認は「抑圧の止揚」であると書くのである。

ここでわれわれは注意深くならなければならない。フロイトは，この止揚は抑圧の「一方の結果だけ」になされると書いている。〈存在〉を承認することにより，抑圧が引き起こした状態は「取り消され」はするが，しかしこの原状復帰は限定的であり，抑圧されたものの〈存在〉だけに関わる取り消しでしかない。もうひとつの判断機能，あの性質の判断は，「それは母ではありません」というような言葉で観念の〈内容〉の承認をあいかわらず拒んでいるのである。つまり観念内容については「抑圧の本質的なものが存続」するのである。したがって否認は「抑圧の諸成果」，「欲望原則の強制」からの自立ではあるが，それはまだ「第一段階」の，つまりこの表現の意味としては半端な自立でしかない。否認は〈抑圧されたもの〉の「存在」を認めつつ，それの「内容」に向けられる抑圧である，というのがフロイトのとりあえずの結論である。

抑圧されたものの存在を認めてしまった知性（インテレクト）は，ここにいたってそれを最終的に「受け入れる」か，抑圧を続行するかを強いられることになる。「受け入れ」は内容まで含めてなされなければならない。一方抑圧の続行は，抑圧されたものの存在が認められてしまった以上，知性と妥協せざるを得ず，知的な（インテレクトゥエル）形式で行われることになる。そこでは否認の理由づけが起こるであろう。それがVerneinung（否認）と類似したもう一つの概念，Verurteilung（「有罪判決を下すこと」）である。[xii] 否認（Verneinung）はnein（ノー）を言うことであった，ノーに相当する表明をすることであった。これに対してVerurteilungが法律用語であることに留意しなければならない。そしてドイツ語に通じている人ならば見逃さないように，それは〈判断〉や〈判決〉を意味するUrteilの一形式でもある。知性はまずノーを言い，そして抑圧の防壁を突き破って意識に出てきてしまったものに，抑圧に代わって有罪であると判断し，判決の宣告をするのである。そして退廷させるのである。フロイトは強迫神経症の患者をその例としてあげている。この例においてフロイトは，たぶん，理由づけという知的な付加作業があるために，verneinenと言わずverwerfenという動詞を使っている。原初の抑圧が抑圧したいものを単に外に投げ出す（von sich werfen）のに対し，知性は「却下する」(verwerfen) のである。[xiii] だからフロイトは〈有罪判決を下すことは抑圧の「知的代替」である〉と書き，否認を〈突き出しの「後継」〉と呼んで，両者を分けたのである。また「却下」はその知的性格ゆえに「抑圧」とも区別される。[xiv] フロイトのテキストは一貫しており，緻密である。否認は抑圧したいものに有罪の判断を下し，その根拠を述べながらそれを宣告して意識から追い出すことで，よりいっそう知的な相貌を鮮明にしてゆく。

この論文の最後で，フロイトは知的な判断を精神分析の深層心理学の範疇に結びつけようとして，二つの判断形式の欲動的源泉について，「是認，それはエロスに，……否認，それは破壊欲動に帰属している」と述べる。『否認』ではここではじめて登場する二つの神話的な概念も，欲望自我と現実自我の概念と同じように，本質的に対立的であると取ることはできないであろう。そもそも抑圧は，そして〈突き出し〉の後継である否認も，これこそが非常に深刻なことなのだが，欲望の充足を実現するためになされるのである。たとえ否認のエネルギーの源泉がエロスとは本質的に異なる破壊欲動であるとしても，否認における破壊欲動は，イポリットも指摘しているよ

うにエロスの目的を遂行するために作用しているのである。[xv] フロイトが「リビド性の構成素」という表現を使うとき，彼はこの本源的な欲動が混合していることを前提としている。このような否認と対比させてフロイトは，破壊欲動がエロスとの混合状態から分離し純粋に作用していると考えられる例をあげている。その記述は「なんでもかんでも否定する快」，「精神病者の拒絶症」というわずか二語でなされているにすぎないが，それとの対比から否認の混合的性格，言い換えれば特殊な是認的側面を読みとることは十分できるであろう。[xvi]

繰り返すと，フロイトは否認を，一方で抑圧したいものの存在を承認しつつ，他方で内容を真実ではないとすることでその存在を無化する，知的行動であると考えている。主体はフロイトが言うように〈抑圧が課す諸制約からの解放〉，〈欲望原則の強制からの自立〉を果たしている。人間はここですでに，欲望と欲求の充足の範疇外の世界の存在を知的に認めるところまできている。それまでは，その世界は〈閉め出され〉，〈突き出され〉て，「自我にとって疎遠な」，縁の薄い別の世界であった。外界は現実原則により主体と異なる外の世界と認められはしても，欲望の対象のある場所であり，そこで欲望が実現するかぎりにおいては，主体との乖離を痛いほどに鮮明化することがなかった。外的世界は否認により，主体にとってそのようなものとして誕生するのである。もちろん，それと同時に，そのような世界と向かい合う主体の自意識も誕生するであろう。思考はこうして視野を広げ，「内容の富んだものになってゆく」。しかしその内容はどのような形式で表れてくるであろうか。

この問いに対するフロイトの回答を示唆するような発言を，われわれはテキストに見出すことはできない。しかしすでにフロイトの記述からは，いくつかのことが想定されてよいように思われる。存在だけは認められた世界，しかし内容を否定された世界，そのような世界を「できれば抑圧したい」世界でありつづけさせながら内容豊かに認識してゆこうとすれば，そのような認識は，対象の内容を捨象した形式が思考の内容であるような認識になるであろう。

捨象される内容とは何らかの情動的で感性的な作用を引き起こす性質であった。それは分析の場面ではナイフで鉛筆の芯を尖らせる真顔の父であり，わたしの手から汚れた洗濯物をついでにでもあるかのように受け取る母であり，夢の中の計算機の解釈を誤ったことに気づかないでいる分析者などである。哲学においては，それは今ここにある「堅くて，冷たくて，容易に触れられ，そして，指でたたけば音を発する」，しかし「火に近づける，と，残っていた味は除かれ，香りは消え，色は変じ，形は崩れ大きさはまし，液状化し，熱くなり，……そして今や打っても音を発しない」蜜蝋である。[xvii] それはまた，「今はこの姿に，次の瞬間にはあの動物の姿に変貌する」ひとりの人間や，「夏至をむかえ，今は果実に，次の瞬間には氷雪に覆われる」この土地といった空想や妄想である。[xviii] 様々な感性的内容が捨象されるとき，父や母は生物学的な概念として，あるいは元型という一元化された内容のバリエーションとしてとらえることができるようになるであろう。蜜蝋やわれわれを取り巻く物には，比例関係を唯一の属性とする〈延長〉という本質的性質だけが許されるようなことも可能になる。変容する人間という空想や妄想は，その内容が捨象されれば空間的に異なる位置を占めなければならない二つの現象が同一空間に表象されること

を意味するし，同時に夏でもあり冬でもある風景の空想や妄想は，時間的前後関係の中で現れる現象が同時性として表象されることを意味するようになる。点の連続としての時間と空間の〈規則〉に従う超越論的認識にとっては，これらは何の現実性も持たない夢想や狂気の世界に属すものであり，統覚にとっては無意味であるばかりか，脅威である。感性的情動的な表象や，神話や詩などに表われるイメージは，確かな認識を脅かすものとして排除され，それらの独自の意味や論理の探求は省みられない。

性質，属性は捨象されると言っても，何の性質や属性も持たない存在はまったく現実性のない存在であり，つまり実在しない。存在が認められる以上，何らかの性質が認められなければならない。フロイトの表現はこの点で正確さに欠けるように思われる。フロイトの考えを補うとすれば，「却下」されるのは性質全般ではなくて，抑圧のメカニズムを逃れてきてしまったこの性質やあの性質であり，危険な属性であると考えられる。したがって存在の承認は，危険な属性を排除し，危険をもたらすこともなければ臭わすこともない脱情動化された無害な性質の承認をもって完成すると考えるべきだろう。ひとことで言えば性質の脱情動化による〈無害化〉である。[xix]

ラカンが『否認』との関連で取り上げているフロイトの症例〈狼男〉には，そのような機能とみなしてよいこの患者の観念のことが述べられている。[xx] フロイトによればこの患者は，4歳のときの去勢の不安に三様の反応を示している。その一つが去勢に対する嫌悪感である。しかし，同時にこの反応には逆向きの第二の反応が付随していて，去勢を受け入れつつ〈女性的〉になることで去勢の代償としようという自己慰撫の役割を果たしている。「第三のもっとも古く，もっとも根の深い反応」[xxi] が去勢の却下である。その際の去勢の可能性の承認は5歳の時に幻覚となって現れる。それは，クルミの木にナイフで刻み目をつけていたら小指を切ってしまい，わずかに小指が皮膚でぶら下がっているという幻覚である。フロイトの解釈では，木は女性であり，ナイフを振るっている患者自身は父を演じている。患者の説明では，この幻覚のきっかけは，足の指が6本で生まれてきた赤ん坊の余分な指が生まれてすぐ切り落とされたという話を聞いたことであった。この話しに触発されて，患者は女性たちも同じように，生まれてすぐ去勢されたからペニスがないのだという幼児理論を作り上げる。「このようにして少年は強迫神経症の時代に，彼がすでにそれ以前に夢を見て知るようになり，その頃は抑圧によって閉め出していたことを，了承したのである」。[xxii] 去勢の承認は女性を証拠にしてなされるが，承認の仕方は，フロイトの記述にしたがえば，女性全体を去勢の犠牲者とする方法をとっている。いわば去勢は，理論化もしくは普遍化されることでその存在を認められるのである。

去勢の承認について述べたあとフロイトは，この少年の父親と，この頃少年が強い関心を寄せていた〈罰する神〉との関係に触れながら，まず，「ポジティブなエディプス・コンプレクス」の存在を確認し，そしてこう言うのである。「ところで，奇妙なことは，この場合にもこの少年には反対の流れがあったことである。反対の流れとは，父親が去勢執行者というよりむしろ被去勢者であって，したがって少年の同情をかっていたことである」。[xxiii] なぜこのような観念を少年が持つようになったかは，フロイトの記述を参照してもらうことにして，ここでは，無害化・脱情動

化がこの少年においてはどのようになされているかに集中したい。

ここで行われていることは，いっそうの〈普遍化〉である。去勢の不安は，去勢が広く行われているとすることで，解消へと向かわされているように思われる。不安は完全には排除できなくても，去勢を怖い父により科される自分一人の運命ではなく，女性や父さえもが避けられなかった不運とすることで，いわば分散される。喩えて言えば，〈赤信号，みんなで渡れば怖くない〉の論理である。現実に脅威があるとしても，それは自分だけの不幸ではない。ここにフロイトは〈ともに苦しむ〉という意味での「同情のナルチスティックな起源」[xxiv] を見るが，われわれにとって大事なことは，〈狼男〉における性質の無害化が〈普遍化〉によってなされる例をフロイトの記述に発見することである。否認に端を発してなされる理論化が，抑圧したいものの存在を認めながら行われる抑圧したいもの自体の隠蔽でありうることに注目しなければならない。我々が何らかの理論形成を試みるときにいかなる課題を背負うかを，我々は意識せざるをえない。

〈狼男〉を例に取り，無害化が普遍化という形式で遂行されうることを確認したが，それとはニュアンスの異なる無害化の例をフロイトは『否認』と同時期に書かれた『抑制，症状，不安』の中で，強迫神経症の症状としてあげている。[xxv] 一つは儀式的行動として反復される「起きなかったことにする」症状である。未開人が魔術を使ってそうするように，患者は症状行動により抑圧したい過去を「吹き消す」のである。もう一つはフロイトが「孤立化」と呼ぶ症状である。体験は忘れられてはいないが，体験の諸関連がバラバラに孤立させられるなり，その一部が抑え込まれるなりして，情動との繋がりが断ち切られるのである。この「技術」が我々にとって注目に値するのは，孤立化により断片化され脱情動化された体験への思考の「集中」が，本来その断片と関連する別の断片の排除として機能するからである。しかし思考は断片化を自ら止揚するようにも見える。強迫神経症の症状を敷衍して，「……通常の状態においてでさえ，集中は本題に属さないもの，どうでもいいものだけでなく，何よりも反りの合わない対立物を遠ざけるために利用される」[xxvi] と述べるフロイトの言葉は，一見する限りでは理論形成を試みる者にとって周知の留意点を指摘しているにすぎない。しかしここで問われているのは，孤立化に立脚した理論が「どうでもいいもの」や「対立物」をもその理論の中で概念化し得ているかどうかではない。そのような〈枚挙〉や〈体系〉は，これらのものを変質化させ理論の中に位置づけ，コンクリートにしていることが示唆されているのである。先に述べた無害化としての普遍化はこうして見ると，孤立化の後に，もしくはそれと並行して，推進されるように思われる。概念的思考の武器は抽象である。だが抽象化された概念が人間にとっての現実を捉えられるようになるには，感性的諸関係のすべてが概念形成へと向かう思考の前で，正当な市民権を認められていなければならないのである。

脅威の存在を認めつつその性質を却下するということは，したがって，性質を無害化することである。脅威を感じさせない，とまではいかなくても，脅威を薄めることである。確認し得たその手法は孤立化であり普遍化であるように思われる。その一方で，普遍化は思考の有効性の主張である。普遍化によって思考は世界の理解を目指す。その例として，私は哲学の歴史からデカル

トとカントを引き合いに出した。ここでわれわれは普遍的な人間理解，世界理解の課題に突き当たる。普遍的な有効性を主張する考え方や理論も無害化の視点から批判的に分析されなければならないという課題である。さらに，概念的普遍化をその手段とする哲学的思考は，このような無害化という危険回避に陥ることなく，情動をも含めた真に感性的な人間の経験を概念的に理解し，自然としての人間の自己理解に努めなければならないという課題である。このような課題はフロイトによれば終わることのない継続的な課題である。「抑圧されたものの知的な仮定的受け入れを余すところなく成し遂げることに成功」したとしても，最終的な〈抑圧の止揚〉は成就しないからである。フロイトの『否認』は非常に小さな論文であるにもかかわらず，知的批判が進むべきひとつの方向を指し示している。

付記

「フロイトの『否認』試訳」において使われている（　）はフロイト自身のものであり，〔　〕は訳者の補足である。

「フロイトの『否認』について」における「」をつけた言葉は引用を示す。それに対し，〈　〉のついた言葉は当該の論点で取り上げられている著作やそこで使われている概念，表現を示唆する。（　）は，著者の補足である。

引用文中の（　）は引用された著作に付されたものである。

---

i　Sigmund Freud, Die Verneinung, in Gesammelte Werke, S. Fischer Verlag, Bd. 14, S. 9 ff.

ii　たとえば Sigmund Freud, Formulierungen über zwei Prinzipien des psychischen Geschehens, ibid., Bd. 8, besonders S. 233参照。

iii　Sigmund Freud, Konstruktionen in der Arbeit, ibid. Bd. 16., insbesondere S. 49 f. ここでフロイトは，精神分析は患者がイエスと言ってもノーと言っても，答えを分析にとって都合のいいように取るという批判に答えている。大事なことはイエスであってもノーであっても，その答えが核心をついているかどうかは何らかの情動的な反応があるかないかで判断されるという点である。つまり抵抗と抑圧が働いているかどうかが重要なのである。

iv　例として以下の著作をあげておく。Sigmund Freud, Über Psychoanalyse, ibid. Bd. 8, S. 39 f. クラーク大学における講義のこの箇所でフロイトは，精神分析の理論に対する感情的な反発を被分析者の〈抵抗〉と類似のものとして記述している。

v　ジャック・ラカン，『フロイトの《否定》(Verneinung) に関するジャン・イポリットの評釈にむける序言』，『エクリ』，弘文堂，第2巻p. 67 ff.

vi　Sigmund Freud, Das Ich und das Es, ibid., Bd. 13, S. 252. この箇所に「自我は……変化したエスの部分」の記述あり。さらに，Die endliche und die unendliche Analyse, ibid., Bd. 16, S. 86. この箇所に「エスと自我は本源的にひとつ」の記述あり。

vii　Sigmund Freud, Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse in: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse und Neue Folge, Studienausgabe Bd. 1, S.

Fischer Verlag, S. 511。この箇所でフロイトは次のように書いている。「エスには否定に対応するようなものは何もない。空間と時間はわれわれの心的行為の必然的な二形式であるとする哲学者たちの命題からも除外されていることを知り，驚かされもするのである。エスの中には時間の表象に照応するものは何もなく，時間の経過の承認もない。さらには，はなはだ奇妙なことでもあり，哲学的な思考におけるそれなりの評価が期待されることでもあるが，時間が経過することでなされる心的な展開の変化もないのである。」時間の観念についての記述はあっても，空間については，カントを意識していると思われる表現の中で時間と一緒に無冠詞で，つまりほとんど命題の名称として触れられているにすぎない。

viii 上記注vii参照。

ix Sigmund Freud, Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens, ibid., 235 f.

x Karl Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte in : Karl Marx/Friedrich Engels Werke, Ergänzungsband erster Teil, Dietz Verlag Berlin, 1968, S. 511 ff. ここでマルクスは「労働の対象化」と言っているが，後の〈経済学批判〉においては正確を期して〈労働力の対象化〉とする。なお，この参照文献ではマルクスは労働一般，つまり経済学の範疇として把握される労働だけではなく，精神的なそれも含めたそれの〈疎外〉，たとえば宗教などの観念の疎外，と疎外自体に示される疎外の止揚の可能性について検討している。さらに重要なことは疎外はヘーゲルにおけるような〈精神〉の自己疎外ではなく，たとえば「粗野な共産主義」が，私的で排他的な欲求が「羨望」として確立されるものととらえられるように（Ibid. S. 534），あるいは近代国家が人間的欲求の対象である人間を排他的な存在のままにして形成される共同体と理解されるように（Karl Marx, Zur Judenfrage, ibid. Bd. 1, S. 369 ff.），あらゆる種類の〈欲求〉の疎外と理解されていることである。

xi Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, zweite Auflage, B 75, 93, 102 usw. In: Kants Werke, Akademie Textausgabe, Walter de Gruyter & Co. Berlin, 1968, Bd. 3,

xii『否認』以前においてフロイトはVerurteilung（有罪判決を下すこと）を仮定的受け入れによる抑圧されたもののAufhebung（止揚）と同義でも使っている。その例は二大症例の一つ〈小さなハンス〉に見られる。Sigmund Freud, Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben, ibid. Bd. 7, S. 375.

xiii ジャック・ラカンはverwerfenもしくはVerwerfungを，retrancher, retranchementと訳し，それを邦訳者は「排除する」，「排除」と訳している。しかし問題は訳ではなく，この概念のラカンの理解である。邦訳書にしたがえば，ラカンはVerwerfungについてつぎのように書いている。「排除は，象徴界の秩序に関するいっさいの表明を端折っています。言いかえると，フロイトが第一次過程として与えた肯定（Bejahung）を端折っています。……存在しているものとして，やがてそこに認められるのが可能になるのは，必ずあとになってでありますから……」。「主体が，このようにして，われわれの言葉を使えば存在に向かう入り口から斥けてしまった（verworfen）ものは，……」（ジャック・ラカン，『フロイトの《否定》（Verneinung）に関するジャン・イポリットの評釈に対する回答』，上掲書，p. 93 f.）。「却下」はラカンが解釈しているように，「いっさいの表明」，「肯定を端折っている」わけではない。ラカンはこの語についての説明を有名な二大症例の一つ〈狼男〉の一節をあげて行っているが，その症例でも，却下される「去勢」の可能性は被分析者によりありうることとして認められている。限定つきで肯定されている。認めた上でそれは「却下」されるのであり，そのうえで性交ではなくそれ以前の「便所理論」が堅持されるのである。そのためにフロイトはつぎのように書いている。「そもそも，それによって（訳者：却下されることで）去勢がありうることについて何らかの判断が下されたわけではない。だがしかし，それは存在しないかのごときものになったのである」（Sigmund Freud, Aus der Geschichte einer infantilen Neurose, ibid., Bd. 12, S. 117）。後半の文章からわかるように，「却下」は却下されるものを「存在に向かう入り口から斥ける」ことではなく，その存在は，その存在だけは認めるのである。存在に対しては〈イエス〉と言い，すぐに〈でも〉と言って限定的な否定を行い，それによって「存在しないかのごときもの」にするのである。本文で述べたように，斥けられるのは抑圧されたものの存在ではなく，その情動的な〈性質〉，〈内容〉である。

ただし，ここでフロイトは「何らかの判断が下されたわけではない」と書いているので，明瞭さに欠けることは確かだが，この文章の直後に，患者が〈去勢の可能性を事実として認めていた証拠〉があると書いている。

xiv Sigmund Freud, Aus der Geschichte einer infantilen Neurose, ibid., S. 111.ここでフロイトははっきりと，「抑圧は却下と異なるものである」と書いている。

xv ジャン・イポリット，『フロイトの《否定》(Verneinung) についての，口述による評釈』，ジャック・ラカンの上掲書所収，p. 367参照。

xvi「何でもかんでも否定する快，すなわち精神病者の拒絶症」。このことについては以下も参照：Sigmund Freud, Das Ich und das Es, ibid., S. 269 f. なお当該の箇所の文章は邦訳書では，このような症状は「リビドー成分の引上げによる欲動混合の現れと解すべきであろう」(『フロイト著作集』，人文書院，第3巻，p. 361。強調は引用者）と訳されており，意味が逆になってしまっているので，後続文中の「しかし」の意味が不明となり，否認との対比となっていない。残念ながらフロイトの著作の邦訳には一般的に誤訳が多い。フロイトの精神分析からくみ取れる可能性を理解する障碍になっている。

xvii デカルト，『省察』，デカルト著作集第2巻，白水社，p. 44. デカルトにとってはどんなに判明な感覚も〈夢〉や〈幻覚〉のようなものである。その根拠は感覚に起こる錯誤であり，錯覚である。錯誤や錯覚が起こりうるためにデカルトは感覚を確実な知識の基盤とはなり得ないとして排除する。蜜蝋の感覚も夢のようなものである。唯一，より確実と思える蜜蝋についての知識は，したがって感覚を捨象し思考の力で思い描かれる〈寓話〉としての物体的空間的な何かである。それを彼は幾何学的・数学的概念のみが有効な〈延長〉と呼ぶ。したがって感覚的な世界は理論的に寓話として構築される世界の症候群として捉え直されなければならない。このことと関連するデカルトの物質論については，ほかに特に，『宇宙論』第6章，同上，第4巻，p. 153 ff.，『哲学の原理』第2部4，5章，科学の名著『デカルト』，朝日出版社所収，p. 64 f.

xviii Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, erste Auflage, A 100 f., ibid., Bd. 4.

xix しかし脱情動化による無害化によっても，それが隠蔽である限りで，本来の情動的なものは脅威であることをやめたわけではない。このことについては引き続き本稿で検討しているフロイトの〈狼男〉における「却下」についての分析を参照。また，著者はまもなく発表される論文「『オイディプス王』における哲学批判と救済・序論」において，この悲劇の主人公の論理志向が〈足の傷〉を隠蔽するための普遍化であること，ならびにその普遍化が完全な無害化とはならず，隠蔽であるためにたえず脅威にさらされていることを指摘した。

xx Sigmund Freud, Aus der Geschichte einer infantilen Neurose, ibid., S. 117 ff.

xxi Ibid. S. 117.

xxii Ibid. S. 118 f.

xxiii Ibid. S. 120.

xxiv Ibid. S. 121.

xxv Sigmund Freud, Hemmung, Symptom und Angst, ibid., Bd. 14, S. 149 ff.

xxvi Ibid. S. 151